# 二〇二五年度　三田学園中学校入学試験問題

## 前期B日程　国　語

〈注意〉各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

| 受験番号 | |
|---|---|

## 一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ものをつくる姿勢には、二つの道があると思う。

一つは、自分の思いを主体にして、つくりたいものをつくる生き方。自分の価値観、自分の信念にしたがって、自分自身が満足のいくものを追い求める。人が理解できないものを生み出すこともあるし、一つの作品を仕上げるまでに、果てしなく長い時間を費やすこともある。【　X　】に、採算や生産性といったことは度外視することになる。

芸術家とは、この道を往く人だ。

もう一つの在り方は、自分を社会の一員として位置付けてものづくりをしていく在り方。需要と供給を意識し、今自分は何を求められているかを見据えた中に身を置く。自ずと商業ベースで考えることになる。世の中の大多数の職業というものは、こちらだといっていいだろう。

僕の音楽家としての現在のスタンスは、後者である。だからといって作曲をビジネスライクに考えているわけではない。もちろん創造性ということを一番大切にしている。

①芸術家になるのは難しいことではない。内容を別にすれば、世間的には自分が決めればいいだけのことだ。誰からも認めてもらえなくても、己さえ納得していればいいのだから話は早い。「私は芸術家です」と規定したら、その瞬間からその人は芸術家である。極端な話、まだ何一つ作品をつくっていなくたっていい。

一方、商業ベースでものをつくっていくには、自分がどんなに「その道の専門家です」「プロとしての自信があります」といったところで、仕事を発注してもらい、力量を認めてもらえなければ成り立たない。「こいつ、面白いな。やらせてみよう」とか「なかなかできるぞ、よし、任せてみるか」と思ってもらい、実際に引き受けた仕事で成果を見せなければならない。それがいい仕事であるかどうかの評価を下すのは決して自分自身ではなく、発注主であり、世の中の需要である。多くの人の気持ちを引き寄せることを目指してつくるわけではないが、絶えずそれを意識していかなければならない。つねに創造性と需要の狭間で揺れながら、どれだけクリエイティブなものができるかに心を砕く。

②どちらも、いいものをつくりたいという気持ちは同じだ。要は、何に価値と意義を感じて生きるかの違いだと思う。

Ⅰ 僕自身、若いころに［　　］として音楽をやっていた時期があった。

大学時代から三十歳になるころまで、現代音楽に傾倒していた僕は、一般の人の理解を得られにくい路線を突き進んでいた。

現代音楽というジャンルの中で最もこれが自分の道と思ったのは、前衛芸術だった。例えば、ジョン・ケージ[注1]の〈4分33秒〉と呼ばれている作品は、ステージに登場してピアノの前に座り、何も弾かずに帰ってくる、というもの。あるいは、グロボカール[注2]には、ステージで椅子を放り投げるというチャンス[注3]オペレーションの作品もあった。音楽の可能性を追求して、そういう実験的な試みがたくさん行われている世界だった。

僕がやっていたのは「ミニマル・ミュージック」といって、短いフレーズやリズムをわずかに変化させながら繰り返していく音楽だ。そこにはクラシック音楽が失ってしまったリズムがあり、【　Y　】な調性[注4]のあるハーモニーもあった。初めて聴いたとき、身体の中を電流が走るくらい

衝撃を受け、僕は一気にのめり込んでいった。

（　a　）、音楽大学を出て十年ほど続けているうちに閉塞感を覚え、自分が音楽をやる意味をあらためて考えるようになった。なぜなら、前衛芸術として自分の音楽的実験を正当化するためにどう音楽的に理論証明をするか、他の人の論理を言葉でどう言い負かすか、ということが日常になってしまったからだ。それは僕にとって、もう音楽とはいえなかった。

Ⅱ どうも僕は、器用に立ち回ってあれもこれもうまくやるということができる性質ではない。③針が振れるときは、極端なくらいに大きく振れる。このときもそうだった。芸術として音楽をやる道を捨て、これからはできるだけ多くの人に聴いてもらう幅の広い音楽をやろう、〝街中の音楽家〟になろう、と決意する。若くて今よりもっと一途だったから、並行的にミニマルの作品も書けばいい、などとは考えられなかった。

そして、来たものはすべてやる心意気で作曲活動をしていたところに、『風の谷のナウシカ』（宮崎駿監督　一九八四年）のオファーが来た。

いったん、④ミニマル・ミュージックを追求する芸術家としての方向性を閉ざしたが、映画音楽のジャンルで自分のミニマル・ミュージックのセンスを形を変えて活かすことができた。あのまま芸術一筋で突っ走っていたら、今日のようなスタイルではないだろう。

Ⅲ「作曲家として最も[注5]プライオリティを置いていることは何ですか？」と問われたら、僕は迷わず、「とにかく曲を書きつづけること」と答える。

今、僕のやっている音楽はエンターテイメントの世界だ。ジャンルでいえばポップスに属する。では、売れればいいのか、目的はヒットする曲を書くことか。それもまるっきりないとはいわない。が、売れることだけに価値を置いていたのでは、志としていささか哀しい。

僕の【　Z　】な考えは、より完成度の高い〝良い音楽〟を書くことだ。結果、人に喜んでもらえれば、この上なく嬉しい。

もし僕が、純粋に自分の書きたいものを書くことを目標に掲げるなら、職業として作曲をしないで、学校の音楽の先生をしながら、一年、二年かけてシンフォニー（交響曲）を一曲書き上げる、といった暮らしをするだろう。自分のつくりたいものだけをつくるには、職業にしないほうがいい。

Ⅳ ものをつくることを職業としていくには、一つや二ついいものができるだけではダメだ。生涯に一作であれば、誰でもいい曲がつくれる。小説だって書けるし、映画だって撮れる。必要最低限のスキルを身につけて本気で取り組めば、どんな人でも立派な作品を生み出すことができる。だが、⑤仕事は〝点〟ではなく〝線〟だ。集中して物事を考え、創作する作業を、次へまた次へとコンスタントに続けられるかどうか。それができるから、作曲家です、小説家です、映画監督ですと名乗って生きていける。

優れたプロとは、継続して自分の表現をしていける人のことである。

（　b　）、プロとして一流か二流かの差も、力量を維持継続していけるか否かにかかっている。

（　c　）、二流といわれるオーケストラがあるとしよう。そこに非常に手腕ある指揮者がやってきて、全員の気持ちを掌握して猛練習を積んだら、トップクラスのオーケストラにも勝てる。集団が結束して力を一点に向けると、予期せぬ大きな力が出る。大絶賛を浴びる素晴らしい演奏ができた。だからといって彼らが二流を脱却して一流になれたわけではない。問題は、一年を通じていつでもそれだけの力が出せるかだ。指揮者が他の人に変わったらできない、つねに同じだけの集中力を保つことができない、となると、やはり二流止まりである。

レストランでも寿司屋でもラーメン屋でも、つねに安定したいい味が提供できる店は本物だ。あるときは非常に美味しかったが、次に行ったらそうでもなかった、という店は、やがて消えていく。

一流とは、ハイレベルの力を毎回発揮できることだ。

（久石譲『感動をつくれますか？』より）

注1　ジョン・ケージ……作曲家。
注2　グロボカール……作曲家、トロンボーン奏者。
注3　チャンスオペレーション……偶然を利用して音楽を作っていく方法の一つ。
注4　調性……音楽理論用語。曲の全体あるいは一部に、その曲の基となる音や音階が感じられるもの。
注5　プライオリティ……優先順位。優先権。

**問一**　【　X　】～【　Z　】に入る言葉として、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　魅力的　　イ　教育的　　ウ　根本的　　エ　必然的

**問二**　□に入る言葉を本文中から二字でぬき出して答えなさい。

**問三**　（　a　）～（　c　）に入る言葉として、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　さらにいえば　　イ　例えば　　ウ　だが　　エ　なぜなら

**問四**　本文は「ものづくりの姿勢」と「ものづくりを仕事にするとは？」という二つの段落から構成されている。二段落目はⅠ～Ⅳのどこから始まるか。記号で答えなさい。

**問五**　――部①「芸術家になるのは難しいことではない」とありますが、どうしてですか。説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　芸術作品さえ作ればもう芸術家だから。
イ　芸術家になるのに誰かの許可は必要ないから。
ウ　芸術というものを誰も理解していないから。
エ　作品を作りたいという意志があればいいから。
オ　芸術家というものの基準が曖昧（あいまい）だから。

**問六**　――部②「どちらも、いいものをつくりたいという気持ちは同じだ。要は、何に価値と意義を感じて生きるかの違いだと思う」について説明した次の文章の空らんに適当なことばを補いなさい。

ものを作る上で［　ア　］場合は、［　イ　］に価値と意義を感じて生きるが、［　ウ　］場合は、［　エ　］に価値と意義を感じて生きる。

**問七**　――部③「針が振れるときは、極端なくらいに大きく振れる」とは、筆者のある経験を比ゆ的に表現したものです。どういう経験か。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　現代音楽という一般の人の理解を得られにくい音楽の路線を突き進んできた経験。
イ　ミニマル・ミュージックに出会い、大きな衝撃を受け、一気にのめり込んでいった経験。
ウ　長く音楽を続けてきた中で、自分が音楽をやる意味をあらためて考えるようになった経験。
エ　映画音楽というジャンルでも、自分のやってきた音楽を形を変えて活かすことができた経験。
オ　これまで目指していた音楽を捨て、ポップスというジャンルの音楽を作るようになった経験。

**問八**　――部④「ミニマル・ミュージックを追求する芸術家としての方向性を閉ざした」とありますが、どうしてですか。その理由が書かれている部分を一文でぬき出し、最初の七字を答えなさい。

**問九**　――部⑤「仕事は〝点〟ではなく〝線〟だ」とはどういうことですか。筆者の仕事で、具体的に五十字以内で説明しなさい。

## 二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「力……よく聞けよ。おまえさ、少しは勉強したいと思わないのか？」

力は首をゆらゆらと横にふる。

「たとえば算数で、ぱーっと計算して答えが合ってたら、うれしくないか？」

①少し悩んでから、力は小さくうなずいた。

「そりゃうれしいだろうけど、たいてい合ってないから。ぼく、頭悪いもん。家庭教師の先生、何度かえてもすぐやめちゃったじゃない。ぼくがバカすぎるからさ」

こういうことを言う力は、本当にムカつく。なにもしないで、最初からあきらめてるんだ。

「おまえは頭悪くなんかないぞ。ただ、病気で授業に出ない日が多かったから、遅れを取っているんだ。あと、がんばらないクセがついてるんだと思うよ」

「だって、がんばれないもん」

力はすぐにこう言う。

②ああ、もう、どう説明すればいいだろう。

「力。考えてみろよ。親だってずっとおまえを助けてくれるわけじゃない。いつかはじいちゃんみたいに、歳を取ってしまうんだ。わかるか？」

「え……でも、そうなったら、お兄ちゃんがいるじゃん。助けてくれるんでしょ？」

冗談で言ってるのか。本気で言ってるのか。

「そんなの、あてにできないぞ。オレはいつかふらっといなくなるかもしれない。事故かなんかで、おまえより早く死んじまうかもしれない」

力がA大きな目をさらに大きくした。

「そ、そんなことないでしょ。お兄ちゃんは強いんだから」

今にも泣きだしそうな目を見て、ほんの少し、罪悪感を感じた。ちょっと脅しすぎたかもしれない。

「まあ、それは可能性として言ってるだけだけどね。とにかく、先のことはわからない。だったら、自分でできることをしていこうよ。おまえだって、ほんとはそうしたいんだろう？」
「がんばると、熱が出るもん」
「熱が出たらやめて休めばいい。元気なときは少しがんばる。ちょっとずつ、前進すればいい。おまえ、再来年、私立の中学を受験するんだろ？」
本当に、今のままでこいつが入れる中学なんだろうか。だいいち、授業にぜんぜんついていけないんじゃ、おもしろくないはずだ。
「うん。でもさ」
力はおもちゃをいじりながら、ぼくを（　a　）見る。
「ぼくみたいなバカで弱っちいやつでも入れる学校らしいよ。作文で取った賞状を見せれば、受験勉強しないでも入れるんだって。だからね、おとうさんもおかあさんも、力はがんばらなくていいって言ってる。なのに、なんで？」
ぼくは小さなため息をつく。
弟にえらそうなことを言える立場かよ。自分だって、オヤジに怒(おこ)られないためだけに勉強してきたくせに。
「……自分のためだよ、力。自分のためなんだ。親のためなんかじゃない」
自分に言い聞かせるように言った。
「そうなの？　お兄ちゃんは、おとうさんのために勉強してるんだと思ってたよ」
力は鋭(するど)いことを言う。
ぼくは苦笑いをしながら、うなずいた。
「そうだよ。ずっとそうだった。でも、これからは、たぶんちがう。将来やりたいことが見えてきたんだ。そのために勉強するんだ。夢を実現させるためだよ」
「ふうん。でも、ぼくには夢なんて、ないよ」
「あるだろう？　なんか、将来やりたいこと」
力は弱々しく頭を横にふった。
「お兄ちゃんはさ、わかってないよ。ぼくみたいな弱っちいやつのこと……」
「どういう意味だ？」
「夢なんてないよ。いつどこで倒(たお)れるかわからないんだ。毎年楽しみにしている遠足だって、行けたためしがない。運動会だって、玉投げ以外したことない。来週のこともわからないのに、将来の夢なんて、持てっこないじゃん。がんばると熱が出るし、ぼくは、自分っていうか、自分の体を信用できないんだ。そういうの、わかんないでしょ？」
力の言葉は、心に（　b　）沁(し)みていった。

たしかにぼくは、③力に嫉妬(しっと)した。けど、自分の体を信用できないなんて、一度だって考えたことがない。本当にこいつみたいに病弱になりたいか？

……いや、なりたくない。

来週のこともわからないから、将来のことなんて考えられない……か。

結局、ぼくは力の気持ちなんて、ぜんぜんわかっていなかったんだろう。遠足に行ったことのない力は、遠足のだるさも楽しさも知らない。自転車に乗って風を切ることも、ムシ暑い日に学校の冷たいプールに飛びこんだときのあの快感も知らない。マラソン大会で必死に走って、汗(あせ)だくになってゴールにたどり着いたときのあの［　Ⅰ　］も知らない。

「そうか。そうだな。たしかに、オレは、弱っちい力のことを、ぜんぜんわかってなかったみたいだな」

力はゆっくりとうなずいた。

「でもな、おまえだって、強いやつの苦しさをわかってないと思うよ」

力が［　Ⅱ　］をとがらせた。

「わかるわけないじゃん。強いやつはなんにも苦しくないんだから！」

「それはちがう」

チビ相手に、なにをマジになってんのかと自分でも思う。でも、なぜかわからないけど、今きちんと話しておきたい。

「あのな、力強いやつだって、弱い心を持ってるんだ。オレは何度も……」

言おうか言うまいか、迷った。

でも、言ってしまおう。

「何度も、おまえみたいに熱を出したいと思ったことがあるんだよ。テストや、試合や、いろんなことから逃(に)げたくてね。でも、オレは強いから熱は出ないし、逃げるのは許されないんだよ」

力は、ぼくを（　　c　　）見つめた。

「……お兄ちゃんって、けっこうカッコ悪いんだね」

「知ってる」

ぼくたちは、二人同時に笑い出した。

「なあ、力、どうだ。すこーしだけ、がんばってみないか？　オレが勉強を教えてやるから。熱の出なさそうなときだけな」

力は黙(だま)って考えているようだった。

「勉強がわかるようになると、学校の授業が少し楽しくなると思うよ」

「……それよりさ」

と、力は[B]目を大きく開いて、ぼくを見た。「みんなにバカだって言われなくなるかな……？」

こいつはクラスで、そんなことを言われているのか。

「ああ。けど本当は、そういうことを言うやつのほうが、ずっとバカなんだぞ」

唇を（　　d　　）噛んで、力は小さくうなずいた。

「……わかった。ちょっとだけ、がんばってみてもいいよ」

よし、と言って、ぼくは立ち上がった。

「じゃあ、明日から、毎日夕方の一時間だけ、勉強を教えるから。わからないことを、まとめておいて」

そのとき、はたと思った。そんな時間あるのか？　コンペ[注]もあるし、自分の勉強もある。梨々の試験勉強も手伝うと約束した。毎日一時間取られるのは、きついかもしれない。ふと見ると、「うん」と言って立ち上がった力は、小さかった。ぼくの背がこのところ急に伸びたせいか、えらく小さく見える。

④ムカつく弟だけど、こいつはぼくがなんとかしないと、きっとろくなやつにならない。自分で自分をバカだと思いこんでいるのは最悪だ。大体、力のクラスの連中に言いたい放題に言わせておけない。それに、その私立の学校に入れたところで、授業にぜんぜんついていけないんじゃ、おもしろくないはずだ。

（佐藤まどか『一〇五度』より）

注　コンペ……コンペティションの略。競技会のこと。主人公はイスのデザインを競う大会に「梨々」とともに出場しようとしている。

**問一**　（　a　）～（　d　）に入る言葉として、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア　じわじわと　　イ　ぎゅっと　　ウ　ちらちらと　　エ　まじまじと

**問二**　――部①「少し悩んでから」とありますが、どうしてですか。説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　計算が合うことはうれしいけれど、勉強はしたくないから。

イ　勉強をしたいとは思うけれど、努力は嫌いだから。

ウ　兄の話すような人間になりたいけれど、経験したことがないから。

エ　正解の喜びは分かるけれど、自分にはできないと思うから。

**問三** ――部②「ああ、もう、どう説明すればいいだろう」について、

i 主人公（「力」の兄）はこの後どのように「力」に勉強の必要性を説明していきますか。次の選択肢の内容を、実際の説明の順番通りに並べかえ、順番に記号で答えなさい。

ア 自分の夢の実現のため。
イ 学校の授業を楽しく受けるため。
ウ 再来年に控えた中学受験のため。
エ いつまでも他者を頼りにできないため。

ii 結局「力」が勉強しようと思った理由は何ですか。簡潔に説明しなさい。

**問四** ――部③「力に嫉妬した」とありますが、「力」の何に「嫉妬」したのですか。二十五字以内で説明しなさい。

**問五** Ⅰ に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 喪失感　イ 疾走感　ウ 疲労感　エ 達成感　オ 義務感

**問六** Ⅱ に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 耳　イ 爪　ウ 神経　エ 口　オ 気

**問七** ――部④「ムカつく弟」とありますが、主人公が「ムカつ」いているのは「弟」のどういうところに対してですか。解答らんに合うように、――部④より前から二〇字以内でぬき出しなさい。

**問八** 波線部A「大きな目をさらに大きくした」・B「目を大きく開いて」とありますが、それぞれの「目」の表現における「力」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 期待　イ 驚き　ウ 恨み　エ 怒り　オ 失望

**問九** 本文の表現について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「……」が多用されることで、読み手に対して応答の間を印象付け、登場人物の内面を想像させている。
イ 「力」の兄が心の中で考えていることは第三者の視点から表現され、その思考が分かりやすく描かれている。
ウ 「力」はその表情の変化によって心情の変化が細やかに描かれるのと対照的に、主人公の感情は秘められている。
エ 兄に対する返答一つ一つが短いことで、「力」がこれまで常に感じていた兄に対する罪悪感が表現されている。

**三、次の①～⑤の説明にあてはまる熟語を、あとの語群からそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度以上用いてはいけません。（順不同）**

① 似た意味の漢字を合わせたもの。
② 意味が反対の漢字を組み合わせたもの。
③ 上下の漢字が主語と述語の関係のもの。
④ 上の漢字が下の漢字を修飾するもの。
⑤ 上の漢字が下の漢字の意味を打ち消すもの。

【語群】

ア 長短　イ 不信　ウ 救助　エ 海底　オ 人造
カ 学習　キ 進退　ク 登山　ケ 消火　コ 再会
サ 非常　シ 日照

四、次の①～⑤は、正しい慣用表現とその間違いやすい表現の組み合わせです。それぞれ正しい表現を選び、記号で答えなさい。

① ア　脚光をあびる　　イ　脚光を集める
② ア　押しも押されぬ　　イ　押しも押されもせぬ
③ ア　とりつく暇もない　　イ　とりつく島もない
④ ア　首をかしげる　　イ　頭をかしげる
⑤ ア　雪辱を果たす　　イ　雪辱を晴らす

五、次の――部のカタカナを漢字に改めなさい。

① 大きな災害からフッコウする。
② ビンジョウ値上げがあった。
③ 無人タンサ機を月に送る。
④ 敗北からのフンキを期待する。
⑤ 患者のジョウタイが急変する。

二〇二五年度　三田学園中学校入学試験問題　前期Ｂ日程　国　語

解　答　用　紙

（一）

一

問一　X　Y　Z

問二

問三　a　b　c

問四

問五

問六　ア　イ　ウ　エ

問七

問八

問九

| | |
|---|---|
| 受験番号 | |
| 総　点 | |
| 評　点 | |

二〇二五年度　三田学園中学校入学試験問題　前期B日程　国　語

解　答　用　紙

（二）

二

問一

a

b

c

d

問二

問三

i

↓

↓

↓

ii

問四

問五

問六

問七

ところ。

問八

A

B

問九

三

①

②

③

④

⑤

四

①

②

③

④

⑤

五

①

②

③

④

⑤

| | |
|---|---|
| 受験番号 | |
| 評　　点 | |